

十二世紀北シリアの都市民と支配者

谷 口 淳 一

十二世紀初頭のシリアは、セルジユク朝とファティマ朝に十字軍諸國家を加えた各勢力による割據状態にあった。強力な中央權力が存在しない状況下で、幾つかの都市では都市住民の中からアフダースと呼ばれる民兵組織が現れ、支配者達にとつても無視し得ない勢力となった。このアフダースと彼らを率いてその軍事力を背景に力行使したライイスは、支配者に抗して都市の「自治」を體現するものとして注目されてきた。しかし実際には、ライイスが都市民の支持を權力基盤にしているとは考えられない事例も見出される。また従來の研究では、ライイスとアフダース以外の都市民の動向が十分検討されてこなかった。

以上のような研究状況を踏まえて、本発表では、ディマシュク(ダマスカス)に比べて研究が進んでいない北シリアの主要都市ハラブ(アレppo)について、都市民の政治活動がもつとも活潑に見られる十二世紀前半を中心に取り上げる。まず歴代ライイスの経歴や就任・罷免の経緯などからライイスと都市民および君主との關係を検討し、またライイス以外に都市民の代表として振る舞った人物についても考察する。さらに、しばしば騒亂にまで發展した宗派問題を視野に入れることよつて、支配者たちが積極的にスンナ派優遇策を進める十二世紀半ば以降とのつながりをも考えてみたい。

一六世紀ハレブ遊牧民部族とオスマン朝

— 總理府オスマン古文書局所藏ハレブ遊牧民臺帳の分析を通じて —

林 佳世子

すでによく知られているように、一六世紀のオスマン朝では、バルカン・アナトリア・シリアの各地域において徴税可能な財源に對し綿密な調査が行われ、それにもとづく徴税臺帳が作成された。スイバーヒー軍人に對しティマルとしてその徴税權が分與された農村が主要な調査の對象であつたが、場合によつては、都市民や遊牧民に對しても同様の調査が行われ、彼らからの徴税項目と税額、あるいは免稅措置が確定された。この際に作成された臺帳の資料的價値については言うまでもないが、なかでも遊牧民については中央集權的なオスマン體制のなかにあつてなかなか實態のつかみづらいたけに詳細で貴重な情報源といえる。

今回とりあげる臺帳は、中央アナトリア地域からアレppoにかけての地域を遊牧地として活動していたトルコ系遊牧民の一部族ハレブ遊牧民集團を對象とし、セリム一世のアラブ征服に伴い彼らがオスマン治下に入った一六世紀前半に作成されたものである。部族とその下位グループの構成、指導者グループ、保有家畜數、それに對する課税額、さらに、構成員男子の全員の名前などの詳細な情報をこの臺帳から得ることができる。

報告者はこの臺帳に關する調査をイスタンブル大學のイルハン・